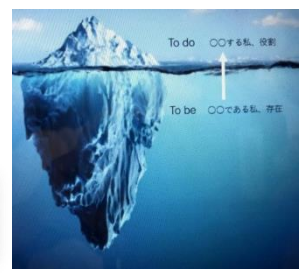




当時、火中の栗を拾うべき代表を引き受けたものの、福岡ホスピスの会（本会）は社会の需要に添い、緩和ケア病院・在宅ボランティアの段階を歩みながらも、今後の方向性に悩んでおりました。2015年「信徒の友」に亡き娘のことを拙くも寄稿させていただきました時、その同じ号に幸運にも樋野興夫先生の「がん哲学外来」の記事も掲載されておりました。

「がん哲学外来!!」「樋野興夫先生!!」恥ずかしくも全く存じ上げませんでしたが、その内容は私たちがこれから歩むべきボランティアの在り方を示唆する心躍る衝撃でした。このご縁は天からの娘からの恵、計らいと、早速にかなり独りよがりな説得を仲間に繰り返しました。2月になると、7年前の樋野興夫先生との初対面の本会の2月特別講演会を追想します。講演会当日、チケットは完売立ち席も出る想定外の参加者となり、社会の「がん」に対するアンテナのすごさ、認識・関心に驚き、自らの勉強不足を恥じ入るばかりでした。講演会の成功のお陰で仲間も一丸となり、早速に3か月後の5月には「がん哲学外来・ぬくみカフェ」の誕生です、速効性だけはあったようです。

あれから7年目を迎える「ぬくみカフェ」、令和3年度全国ボランティア部門で勿体なくも、厚生労働大臣賞を受賞することができました。本会結成から24年、方向性に迷いながら難破船となり沈没寸前にも関わらずここまで歩めたのは、樋野興夫先生との邂逅があればこそ、この晴れがましい受賞も「ぬくみカフェ」がタスキを繋ぎ導いてくれたのです。今コロナ禍の闇の中で対面こそ控えつつも、リモートのお陰でカフェの共有が全国的に広がりを見せております。禍福はあざなえる縄のごとし、これこそ「一寸先は光」これからも温もりある仲間と試行錯誤を繰り返し、皆様のお力やご助言をいただきながら、全国がん哲学外来のカフェの絆の輪が一層大きくなりますように願い、祈りに代えさせていただきます。



こころがあたたかくなること あうんの家 荻原 菜緒（軽井沢“ほっちのロッジの診療所”）

先日、小諸市と病院が取り組んでいる出張がんサロンのオンライン語り会に参加しました。コロナ禍で地域の中のサロンや語り会が開かれない状況もあり、事前にたくさんの声が届きました。病院の外来だけでは埋まらないところに芽生えた不安や苦悩、孤独な気持ちなど。繋がるのが制限されている今、病と向き合うだけでなく、子育てや介護、日々の生活を普通に生きる上で、これまで以上に、「つながり」や「つながっていると感じる」ことが大切な意義をもつと感じます。

なぜ人は”つながり”が必要なのだろうと考えていたら、我が家の雛祭りでの場面を思いました。我が家の雛祭りには特別な思いがあります。我が家の娘が生まれてきて家族に加わった時、心から祝福して下さった方が、ご自身のお家に長年大切にされていた木組みの雛人形を娘に贈って下さいました。

以来、我が家にとっての雛祭りは、私たちが縁つながり家族となったこと、そして私たち家族に伴走して下さる沢山の方々に感謝する特別な時間となりました。今年のひな祭り、五歳になった娘に、“家族って何だと思ってる?”と問うてみました。しばらく考えてから、“こころがあたたかくなる”と娘は答えました。私は胸があたたかくなり心励まされるのを感じました。

コロナウイルスの流行や戦争の勃発など、ひとりの人間の力では何もできないように感じるものが度重なる中で、こころがあたたかくなる、このことこそ、どのひとりにとっても大切で確かな力となるのではないかと、以前にも増して感じています。